広島大学水畜産学部

皿山学舎

思い出の記

平成26年3月吉日

覚峰英俊
(松井英太郎)

［序にかえて］

広島大学水畜産学部開学当初の思い出

親からもらった人生片道キップ、引き返すことのできない旅もそろそろ終着駅が見えてきました。

思い返せば激動の一生でした。昭和4年山里に生まれて間もなく満州事変(昭6)が勃発し、次いで日中戦争(昭12)が開戦しました。

私達は尋常高等小学校に入学、卒業は国民学校(昭17)でした。米英対日宣戦布告(昭16)されて戦時体勢となり、苦しい生活のうちに中学校に入学しました。

教科の中に軍事訓練があり、二年生の時、学徒動員として呉海軍工廠で一年間昼夜勤務で、お国のためと一生懸命に「欲しがりません 勝つまでは」を合言葉に働きました。

戦争は負戦に終わり、復学して勉強しました。同級生でありながら中学四年で卒業するものと、五年で卒業するものに分かれました。

私は中学五年通学させてもらいましたが、一年間は営農しながらでした。学問は進まず、進学をあきらめていたところ、幸いに高校(新制)が施行されて、広島大学水畜産学部畜産学科に受験し合格しました。

入学時、大学に提出したものは「誓約書」と入学者心得による入学料と授業料でした。

入学式は昭和24年7月18日　広島高等学校講堂でした。その時提出したものは、入寮申込書で、私は高等学校の寮(広島市十日市町)で教養学部中は生活しました。

広島県深安郡大津野村皿山はその名のとおり、私達のいた頃に陶器の里で「藤本家」という陶器製造所があり、入学記念として「カブトガニ」のかたちをした灰皿を創ってもらい全員に配ったのです。

福山の市街地と皿山とではかなりの距離がありますが、バス便しかなくその上便数も少なく不便でした。厳寒期や猛暑期には、私達は途中で休む所が必要でした。現在のように大きなお店に入って休むような所はありません。
私は御門町に下宿されていた女子高等師範学校の下宿で時間待ちをさせてもらいました。

当時学生であった畑中秀さん、天上和枝さん、浜田節子さんに大変お世話になり今でも感謝しています。

緑翠寮の近くに一軒の飲み屋があり、よく一杯やったものです。豪華に飲むときは大門町まで出かけました。ある晩一杯やった帰路に正規の道は山の麓を通ると大回りになり、海岸を歩くと近く早く帰れるのでそこを歩いたのです。しかしそれは自衛隊の中を通らなければなりません。学部と隊との境には「守衛所」があり難所でした。難所にかかりほろ酔い気分で衛兵さんと「通せ」「通さない」と問答になりそのうち眠気がさして5人とその場で眠り込んでしまったのです。翌朝になり「起きなさい」と大声がする。目を覚ますと山根学部長先生が立っておられました。あわててとび起きたのです。「帰ろう、やる者だね」と一口言われ、あとは無言でした。その後もこの件についての話はありませんでした。

当時の先生は寛容であったと今でも頭が下がりますし、良き時代だったと思い出す毎に感謝しています。

「緑翠寮」の名前は、初代寮長だった瀬藤君に「寮名は何にするか？」と云われ、私がとっさに「緑翠寮だ」と答えたことにはじまります。

その理由は、私が生まれ育った故郷(三次市三良坂町灰塚)に「穴観音」を本尊とする積翠山白鷺寺という庵を思い出し、「翠」の字を用いました。
1735年に建てられた小さな庵ですが、若い男女の悲恋物語だけが未だに伝わっている廃寺なのです。醉とは「陸の色、海の色」を表す青緑色であり、翠玉のように「永遠なる光を放つ学部であれ」と願ったのです。

誓約書

本籍地
現住所

右に同じ

昭和三年　五月二十五日生

此の度貴大学に入学の許可を受けましたについては諸規則命令等堅く守ることは勿論在学中一身上に関する事件については本人及保證人連帯でその責任を負ひますことを連署を以て誓約申上ます。

昭和五年七月　五日

本籍地
現住所

保證人　続柄（本人より）　氏名　印

本籍地
現住所

保證人　続柄（本人より）　氏名　印

廣島大學長事務取扱　櫻井役殿

入學者心得

入學手続

入學許可を受けた者は、七月十一日（月）迄に本學部皆実分校（広島市皆実町三丁目広島高等學高内）教務課へ左記書類を提出すること。期日迄にこの手続きを終えないものは入學許可を取消す。

一、入学料　金四百円

一、授業料　前期分（七、八、九月分）金九百円

但し大學豫科、専門部その他の直轄學校在学者で、その學高の授業料を既に納付してゐる者は、差額を納付すればよい。この場合は前の學校で発行した授業料の領収証または納付証明書を提出しなければならない。

一、誓約書

一、進学適性検査受験票

帰納の入学料及び授業料は一切返還なし

二、入學式

七月十八日（月）午前十時より広島高等學高講堂に於て入學式を挙行する。入學者は午前九時三十分迄に出校すること。

式後、教養学科目の種類、課程、學科目の選擇等に関して注意を興える。

三、入學許可取消願

止むを得ない事由に依り、又は他校へ入學の為、本學へ入學が出来なくなり、入學を取消す場合は、七月十一日迄に必着する様に皆実分校教務課へ、入學取消願を願ひ出ること。

四、育英會

引き続き育英會奨学金を受ける者は、「奨学生大學入學届」を一週間以内に皆実分校生徒課へ提出すること。

昭和廿四年六月廿五日

廣島大學

学部創設から四半世紀　[昭和 24 年から 49 年まで]

水畜産学部設置と草創期の学部

[学部の創設]

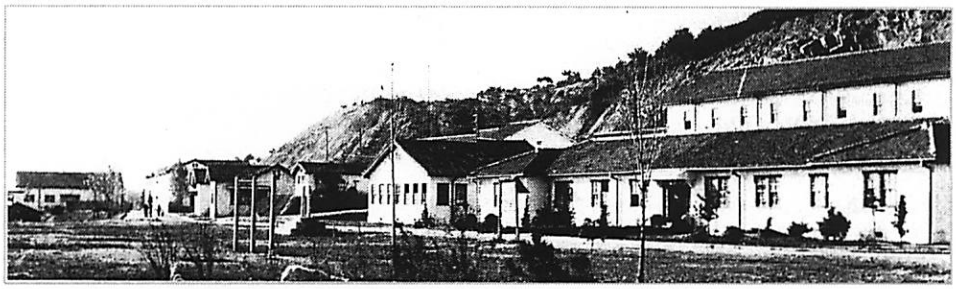
昭和 22 年 4 月に広島青年師範学校が高田郡吉田町から福山市沖野上町の旧兵営跡へ移転するに際して、福山農産科大学設置が構想された。それが変容して、水産、畜産行に関する教育、研究、地方産業の育成を図る目的で水畜産学部の設置が企画されたと広島大学 25 周年史部局史に述べられている。昭和 24 年 5 月 31 日に広島大学が設置され、水畜産学部が設置された。瀬戸内は沿岸漁業が盛んで、また、中国地方は古来、和牛の生産地ということで、人材の育成が期待されたと考えられる。

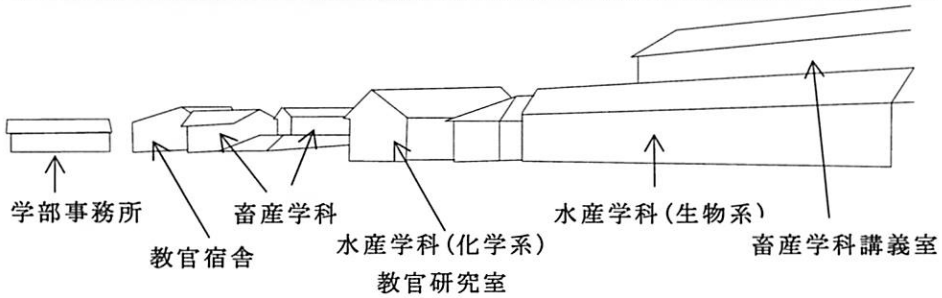
学部長事務取り扱に理学部藤原武夫教授が 6 月 28 日付で命ぜられ、初代学部長月として、元台北帝大教授山根甚信が 7 月 26 日付で発令された。また、第 1 回の入学試験が 6 月 15～17 日に実施され、7 月 18 日に第 1 回の入学宣誓式が行われた。

発足当時は、水産学科 7 講座（漁業学第 1・漁業学第 2・水産海洋学・水産動物学・水産植物学・水産化学・水産資源および増殖学：教官定員：教授 7、助教授 9、講師 3、助手 2）と、畜産学科 7 講座　（畜産学　　第 1 ・畜産学第 2・畜産製造学・農業経営学・獣医学・農学第 1 ・農学第 2 ：教官定員：教授 7、助教授 8 、講師 4、助手 3 ）であった。講座という名称を使っていたが、正規には学科目制であった。

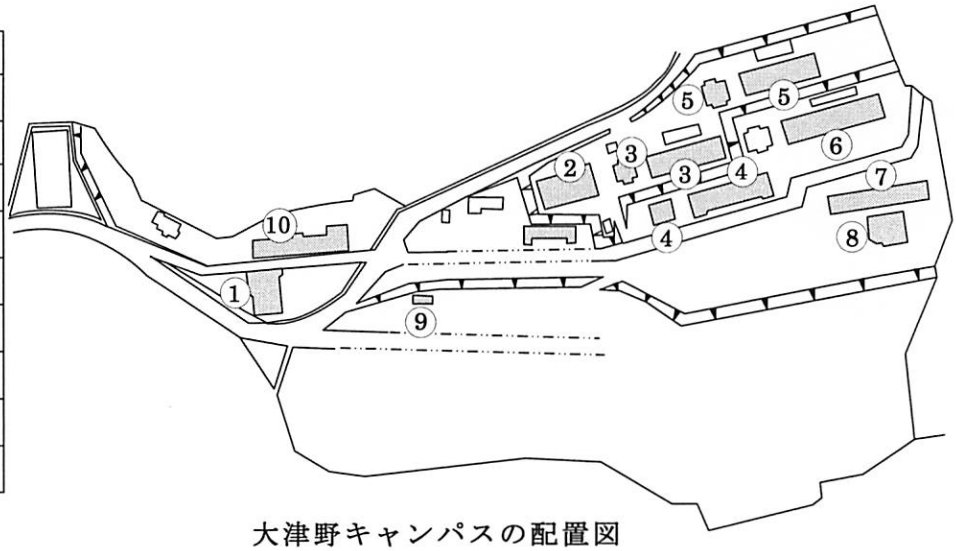
本学部は、沖野上町（現在緑町）の旧軍施設跡に創設されたが、昭和 24 年 11 月には農学関係の一部を残して、大津野村（現在鋼管 ）の駐留濠軍施設跡に移転した。大津野キャンパスは広すぎるため、西側に校舎・教官宿舎・学生寮・運動場・深安実験牧場などが、また東側に警察予備隊　（後に自衛隊病院 ）が入っていた。海を眼前にして素敵な環境であったが、この頃は教官研究費が少なく、寄付金を集めたり、器具を手作りするなど苦難の時代であった。

学部が同一キャンパスに終結することの必要性が痛感され、昭和31年ころから推進をはかったが、困難な問題があり実現が困難であった。日本鋼管の進出などがあり、昭和39年4月に再び沖野上町に帰ることができ集結がかなった。

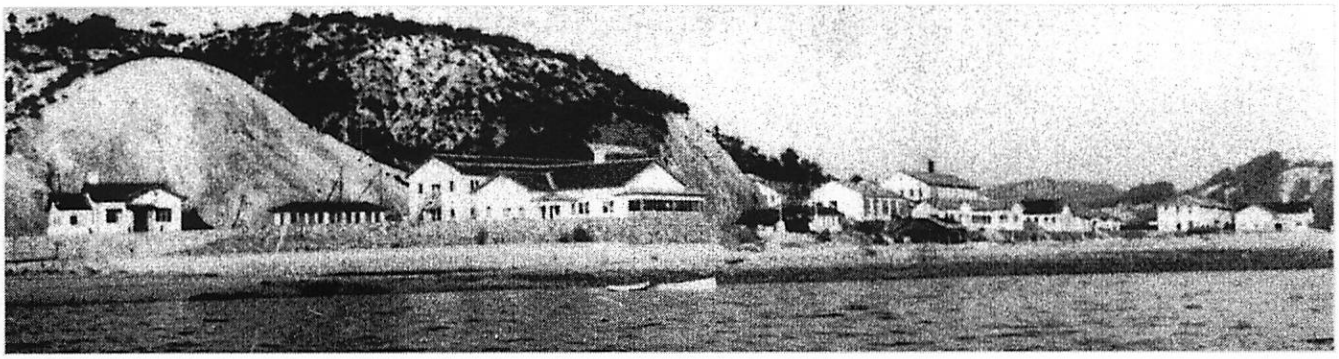




①	事務室
②	畜産研究室 実験室
③	畜産教室 実験室
④	水産研究室
⑤	水産教室 実験室
⑥	図書館及び水産実験室
⑦	寄宿舎
⑧	食堂
⑨	畜舎
⑩	職員宿舎



大津野キャンパスの配置図



海からの大津野キャンパス

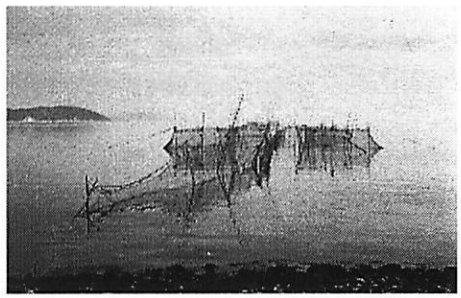
[水産学科の変遷]

水産学科は、当初は、水産学に関する広範囲な知識を習得させるとともに、実施に役立つ研究者、技術者の養成を目指して、実験、実習を重視した。発足当時の7講座については上記している。水産の産業形態が漁撈・養殖・製造の3分野に大別されたことら、Aコース（物理的実験に基礎を置く ：漁撈、機械思考のもの)、Bコース（生物的実験に基礎を置く：水産資源、増殖思考のもの)、Cコース（化学的実験に基礎を置く：水産化学、製造指向のもの）という志望コース制を選ばせた。

Aコースは、漁業学第 1、漁業学第 2、水産海洋学が、Bコースは、水産動物学、水産植物学、水産資源および増殖学が、またCコースは、水産化学講座が主として責任を分担して行った。分担講座数の不均等から、水産化学講座に教授 1、助教授 3、講師1を配することにして教育に当たった。

昭和 38 年 4 月に漁業学第1を漁業学、漁業学第 2 を水産物理学に改称した。食品工業化学科の新設により、研究・教育の重点を、水産生物の増養殖におくことにした。7 講座は、漁業学、水産物理化学、水産環境学、水産動物学、水産植物学、水産増殖学、水産化学に改組された。食品工業化学科への教官の移動も起こった。

その後、昭和 46 年に水産物理化学も食品物理化学として食品工業化学科に移された。



一方、昭和 36 年水産学専攻科が設置され、これは、昭和 43 年に大学院修士課程の新設により、農学研究科水産学専攻となった。

付属施設としては、付属水産実験所、研究・実習用船舶、水族飼育設備、水産製造実験実習工場があった。

[畜産学科の変遷]

畜産学科は、当初は、有畜農業に対応する教育を指向していた。発足当時の7講座については上記している。学部設立後 10 年を経過してくると、経済成長の影響で畜産業が有畜農業的副業型から、多頭飼育の専業経営型へと移行し始めた。それに伴なって、昭和 37 年に有畜農業的なものから畜産プロパー的科目に授業科目が改正され、講座名も大幅に改正が行われた。畜産学第1は家畜繁殖学、畜産学第2は家畜学、獣医学は家畜衛生学、農業経済学（昭和 26 年に農業経営学を改称）は畜産経済学、農学第1は飼料作物学、農学第2は畜産化学に改称し、畜産製造学のみが従来通りであった。

昭和 41 年に食品工業化学科の新設により畜産製造学を新学科に移すことになり、教官の移動も起こった。残る6講座で、家畜繁殖学は家畜育種・繁殖学、家畜学は家畜管理学、家畜衛生学は家畜解剖生理・衛生学、畜産化学は家畜飼養学、飼料作物学は草地学に改称し、畜産経済学が従来通りであった。

一方、既述の水産学科と同様に、昭和 36 年に畜産学専攻科が設置され、これは昭和 43 年に農学研究科畜産学専攻となった。

付属施設としては、発足当時には、川口農場、大津野実験牧場、加茂牧場とあり分散していた。福山移転後は結集し、御幸の付属農場とキャンパス内の実験動物舎、精

密圃場となり、畜産製造実習工場があった。　（久保田　清）

[水畜産学部胎動期回想]　江草　周三（旧教官）

福山市在の国立広島青年師範学校を母体として新制広島大学に水産学科と畜産学科から成る水畜産学部を造る話が進んでいる。水産学の専門家として、君、行き給えと東大の恩師と言われた。当時私は大学院5年終了間際の28歳の若輩であったが、恩師の紹介状を懐に知人ひとりいない福山青師にやって来た。昭和23年8月のことである。来てみて驚いたのは校舎で、市街の大半が戦争末期の空襲で灰燼に帰したなか、不思議に残った第何師団何聯隊かの古ぼけた兵舎であった。

8月12日付け2級職講師の事例を受け、何が何だか分からないまま忙しい毎日が始まった。当時、水畜産学部創設の中心となって動いていたのは広島文理科大学理学部の藤原教授で、来福された同教授を中心に野尻青年師範学校長、一二の有力青師教授そして私も加えられ、進学部創設準備についての会議が夕方からしばし行われた。水産の教育と研究について具申すること、必要な図書その他を入手することが私の責務であった。

青年師範学校には水産科という一クラスがあり20何人かの生徒がいた。彼らを対象とする水産概論や海洋学など、加えて英語の授業も受持たされた。すべて初めてのことで準備を含め大わらわであった。生徒は歳が私と十も違わず友達のようなもので、大学創設向けの私の雑用など喜んで手伝ってくれた。そうこうするうちに先輩の榎並さん（後に水産動物学助教授）そして大先輩の西田さん（後に水産海洋学教授）が来任された。私の仕事は余り減らなかったが気持ちは随分楽になった。大学設置と青師廃止が決まり、昭和24年春水畜産学部の入試が福山で行われることになった。優先入学の期待が外れ、水産科の生徒にも入試が課せられた。受験しなかった者がいたし、不合格になった者も少なからず出た。まことに残念であった。

やがて水畜産学部は福山市郊外大津野の海岸造成地の元駐留濠軍施設の木造ながら良く出来た建物に移った。山根初代学部長、また新任教官が続続と来任され、研究室も整備されていった。そして昭和25年秋水畜産学部一回生が広島市での教養課程を終えて進学してきてようやく大学の体をなすに至った。この辺りのことは別の方が書きたることと思う。

食品工業化学科の設置

学部創設後10年がたった昭和35年ころから学部内に1学科を増設して、学部の発展を図ろうとする動きが起こり始めた。昭和36年度に、理工系重視の社会情勢を考慮して、食品工学科の増設を立案し、文部省の見解を打診したが、認められなかった。昭和39年に構想を改め、既存学科の中の2次産業に対する教育を中心、すなわち食品製造加工に関した分野を中心に食品工業化学科の新設を申請することにした。昭和39年には実現しなかったが、昭和40年には、進学志望者増大対策が行われたのに乗り、学生定員30名の5講座（畜産食品製造学、水産食品製造学、食品化学、食品分析学、食品衛生学）が認可され、昭和41年度より発足することになった。昭和41

年に畜産食品製造学が畜産学科の畜産製造学の振替とされた以外は新規であった。昭和 44 年度を完成年度として、次年進行（昭和 42 年に水産食品製造学、食品化学、昭和 43 年に、食品分析学、昭和 44 年に食品衛生学 ）により 5 講座が整備された。昭和 46 年には、水産学科から水産物理化学が食品物理学となって移管され、6 講座の学科となった。この間に、昭和 45 年に急速に発展する食品工業界の要請に応えて食品分析を食品化学工学に改変し、食品分析に関する授業科目の内容は関連する講座で分担することにした。

一方、大学院は、第 1 期生の卒業時に合わせて開設できるように申請が行われ、昭和 45 年に食品工業化学専攻として設置された。

付属施設としては、食品製造実験実習工場、工作室ができた。

［食品工業化学科の増設をめぐって］　橋本　秀夫（旧教官）

昭和 24 年、新制広島大学の 1 学部として創設された水畜産学部は、水産と畜産のわずか 2 学科であり、農学系としては全国一のミニ学部として長い間過ごしてきた。その水畜産学部は海と陸という専門分野のかけ離れた学科で構成されていたために、何かにつけて、お互いに張り合っていた。別の言葉で少しオーバーに表現すると、犬猿の仲ということである。このような状態の中で、時代は大学でも理工系の拡大ブームか起きてきたことも有って、農学部の改組、拡充問題が論議されるようになった。

昭和 36 年 5 月から、学科増設専門委員会が活動し始め、37 年度から概算要求を提出するようになるが、一方では大学院新制の機運も起きていたために学部としては、併願するか、どちらを優先するかで会議は紛糾した。従って申請したり、しなかったり文部省に通ったが大蔵省段階で落ちたりと、昭和 41 年の増設までには幾多の変遷があった。

新しい学科の分野や名称などを巡って議論された点は、以下のようなものである。

1. 農学系の学部でありながら農業の基本となる農作物関係の学科が無いので、農学科をつくろう。2. 農学部の学科として一番多い農芸化学はどうか。3. 同じような理由で、農業工学にしよう。このような議論の末に、たどりついたのが食品製造関係の学科案であった。既に農芸化学科を持っている他大学では関連する食品系の学科増設を計画していた。そこで学部は欠けている農芸化学の分野も少しばかり取り入れた食品系の学科で、しかも水畜両両学科の製造学部門を基本とする案が提示され、両学科とも了承された。

説明の要点は両学科の発展となり、しかも両者が関係する動物性タンパク食品を中心とした製造学科とすることであった。しかしながら、もうひとつ陰で話されていたのは、新しい学科が両学科の緩衝的役割を果たす学科になることへの大きな期待であった。

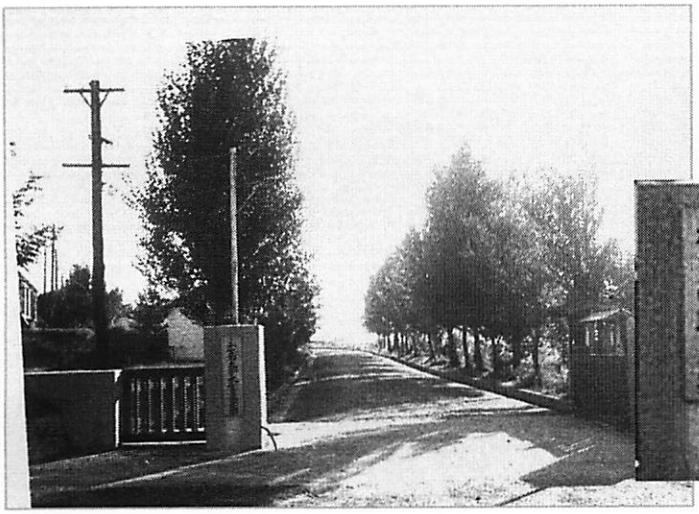
何しろ、それまで両学科は何事も平等、バランスセオリーしいう考えが基本となっていた。例えば学部長は両学科から交代で選出するとか、評議員は学科主任を候補者とすることなどである。それが第 3 学科の出現によってバランスが崩れ、すべてが選挙で選出されることとなった。一方では大学紛争も起こり始めていたこともあって、

新学科の増設は我が学部の歴史、民主化にとって、極めて重要な意識改革をもたらす切っ掛けともなった。

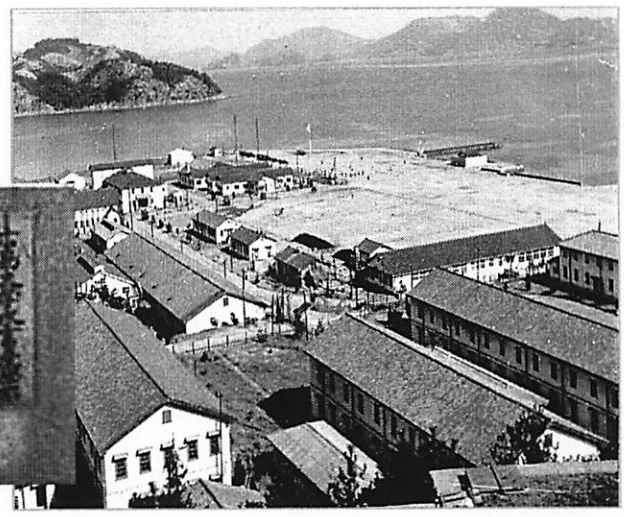
学科の名称は食糧化学科として申請したこともあったが、農学系でも工学の名を冠する方が有利であるということになり、最終的には食品工業化学科となった。国立の農学部で同じような食品系の学科が増設されたのは、東北大、九大、名大、香川大であり、水産学部では北大、東水大、長崎大、鹿児島大には設置されていた。また、他の農学部では農芸化学科の組織充実のために設立されたものが多い中で、我が学部の食品工業化学科は動物性タンパク食品が主要な対象であり、しかも、食品化学工学、食品衛生学、食品物理化学という新しい講座を取り入れたのが他大学とは大いに異なる特徴であった。一方、微生物利用学（発酵）関係は工学部に発酵工学科があるので、この分野は重複しないようにというのが暗黙の了承事項となっていた。

その食品工業化学科も水畜産学部から生物生産学部への改組に伴って食品系となり、さらに現在の食資源機能学コース、微生物の関与が深い分子細胞機能学コースとして発展してきたのは、これも新しい時代の変化、流れというものであろう。

海岸からの大津野キャンパス



大津野キャンパスの正門



昭和24年(1949)11月4日　水畜産学部が深安郡大津野村皿山に設立

昭和39年(1964)4月1日　水畜産学部は福山市大門町から福山市沖野上町へ移転

学生生活と課外活動

本学部の学生生活は、深安郡大津野村皿山　(現在福山市鋼管町)、福山市沖野上町(現在緑町)および現在の東広島市の3キャンパスを中心に営まれてきた。

皿山キャンパス時代（昭和25年～39年3月）

開学当初

水畜産学部と称していた本学部の学生生活の記録は、第一期生が教養課程を終えて進学した25年10月に始まる。同年11月7日に教育学部福山分校で森戸学長、県知事らの参列のもと開学式が行われ、続いて開学記念祭として講演会・音楽会が催された。本学部は公開され、8日に校内競技会、9日に運動会、バザーなどが行われた。

本学部は新設学部であったため、この時には、学寮以外の福利厚生施設や自治会組織・課外活動団体などは、皆無であった。しかし第一期生とそれに続く開学当初の学生は、神学部の伝統の基礎作りに積極的に行動した。

このころの様子を村上豊助教授（元学部長）は以下のように述べている。

「・・・・かっては学部唯一の車であった小型トラックで福山駅から引野街道を皿山まで運ばれてから既に十三年目になる。・・・学部創設時のことばかりがいやに鮮明に浮かんでくるのも歳のせいか。警察予備隊（今の自衛隊）も来ていなかったから、いわゆる三十八度線もなく、従って今の自衛隊の敷地にも自由に出入りできた・・・練習船豊潮丸も旧海軍の駆潜艇の姿のままで、今の自衛隊の桟橋に係留されていた。夕方は六時になるとバスはなくなり、よく福山から歩いて帰ったものだ。まもなく第一回の学生諸君が広島から戻り、時を同じくして隣に自衛隊も入ってきた。・・・助教授の第一の仕事は学生の実験設備を整えることであった。学生諸君と一緒に縁の下にもぐり、水道管を敷いたり、馴れぬ手つきで電気の配線に精を出したことか思い出される。一、二、三回生ぐらいまでは、コースの如何に関わらず、どの学生諸君の顔も実によく憶えているのは不思議な気がする。何か新しいものができるような、又作り出そうという気持ちも強かった。・・・十年前の第一回学内野球大会で水産の教官軍シャークスが、学生軍ドルフィンズとたたかって優勝したことは特筆すべきことであろう。

果たして今、この頃のスタミナが自分にあるのかいささか危うい気もする。・・・往時の学生諸君の軒昂たる意気を思うとき、現在の学生諸子に果たして同様の或いはこれ以上の理想と勇気ありや否や、あえて問う。・・」

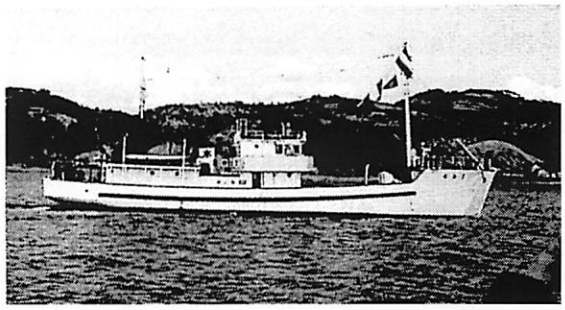
(学友会誌「緑翠」創刊号)

軟式野球大会後(水産学科の学生・教官、昭和 27

授　業

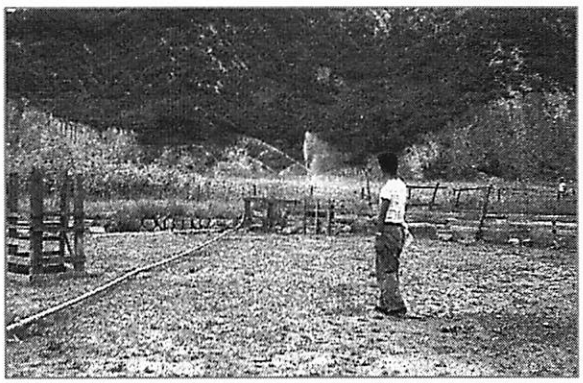
二つの牧場　昭和 27 年に化学系講座が、31 年には獣医学講座が沖野上町(現在緑町)キャンパス（当時は「教場」と言った）内の旧兵舎改築校舎等に移転し、この年から同キャンパス内の煉瓦作りの旧軍施設を改修した建物で、水畜両製造関係の実習が行われた。このため学生は、日によってどちらかのキャンパスに通学していた。両キャンパスとも講義室は木造であったため煖房がなく、冬には学生は講義の合間にストーブのある図書室で暖をとった。

水産学科　漁業学第一（38 年から漁業学）・同第二（38 年から水産物理学）・水産海洋学の三講座が主に担当する A コース、水産動物学・同植物学・同資源および増殖学の三講座が主に担当する B コース、水産化学講座が主に担当する C コースに分かれていた。(42 年度まで)。これら 3 コースに 共通して乗船実習があったが、A コースには漁業学実習があり豊潮丸に乗ることが多かった。豊潮丸は初代が 79 総トン（29 年に改造され 102 トン）二代目でも 81 総トンで、コース別の実習でも狭かった。学部開設当初から簑島に実験所があり、34 年に簑島浅海干潟実験所となり、36 年には熊野淡水生物実験所が、37 年には仙酔島に鞆臨界実験所が開設され、主に B コースの学生が実習した。C コースの学生は沖野上キャンパスの地形が多かった。

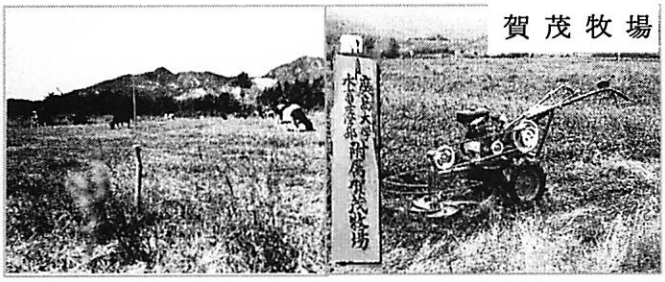


初代　豊潮丸

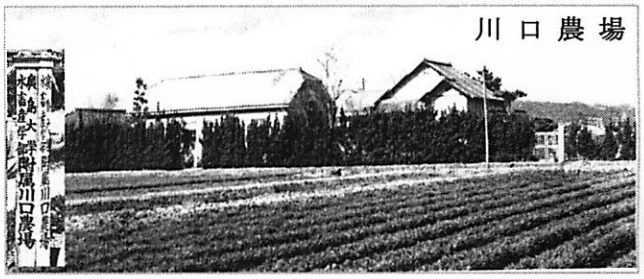
畜産学科　農場も、少数の乳牛・緬羊・豚・家鴨等を飼育し日常的な畜産学に関する実習の場であった皿山キャンパス内の深安実験牧場、作物学を中心とする農学の実習を行った川口農場、および賀茂郡八本松村（現在東広島市八本松）にあって乳加工を含む一貫した酪農経営の実習が行われた加茂牧場の三ヵ所に分かれていた。加茂牧場での実習は夏に集中で行われた。学部の緑町への移転に先立ち、37 年に深安実験牧場が廃止され、38 年 12 月に御幸農場が完成するまで、家畜に関する実習に不便であった。38 年にはスクールバスが導入され、水産学科生の簑島・熊野・鞆の三実験所や畜産学科生の御幸農場での実習への移動が便利になった。



深安実験牧場



賀茂牧場



川口農場

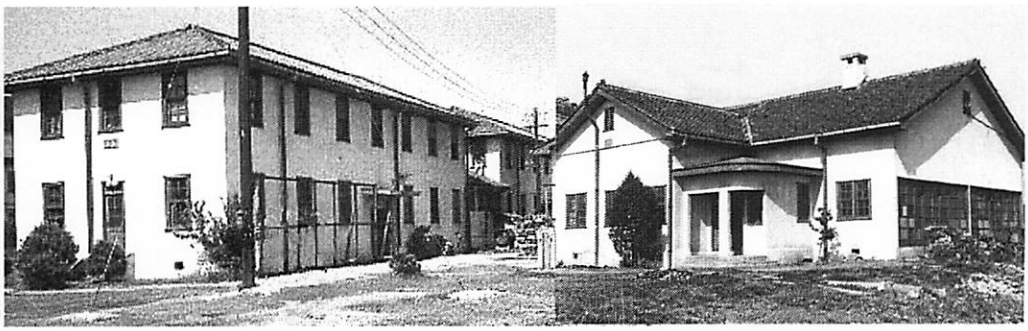
課外活動

皿山キャンパスには、課外活動施設はほとんどなかったが、教職員と学生の軟式庭球や軟式野球の交換試合がしばしば行われた。また、市の中心から遠く周囲に娯楽施設に乏しいため、寮での麻雀・卓球・囲碁などが行われた。

この時代の終わりの本部学生のアルバイトは家庭教師や、塾の講師など希望すればできた。就職も大学院や専攻科への進学者を除いて100%であった。

寮　　この時代、自宅通学以外のほとんどの学生は、進駐濠州軍の下士官兵舎と集会所を改修した寮に入っていた。この寮は100名の学生を収容し、二人部屋で、食堂・集会所があり、トイレは様式という当時としては良好な寮であった。25年10月には学寮自治会が結成され、31年に緑翠寮と命名された。

緑翠寮



食堂と集会所

居室

学友会

25年12月には水畜産学部学友会が結成され、31年には機関紙「学友会紙」を創刊したが続かなかった。広島県警が広大生にスパイを強要したことに抗議する全学集会にあわせて学友会は33年6月に事業を放棄して学生大会を開き、県警本部に抗議文を送った。また、35年6月には安保改定に反対する抗議集会を教育学部福山分校学友会と共催で開き、初のデモ行進を行った。38年3月には学友会誌「緑翠」が再創刊され14号（51年3月発行）まで続いた。

サークル　　30年には学友会文化部・同運動部として数部が届けられていたほか、福山生物学会・農業問題研究会が活動していた。この時代の終わりには、学友会の傘下に書道同好会・囲碁・空手・山岳・柔道・ヨットなどの各サークルが活動していた。

行事　　学友会の行事の一つは「開学記念行事」で、学部公開や学外展示などを催していた。33年から教育学部福山分校学友会との共催で、広島大学東部大学祭として続いた。

学部が緑町キャンパスに終結する直前の38年12月第一回フェニックス駅伝が、東千田キャンパスと宮島口を往復するコースで行われ、わずか一週間の練習で参加したが、10位であった。

藤井俊策先生の遺稿

水畜産学部発足

水畜産学部は昭和24年5月31日、広島大学の1学部として誕生した。6月1日に第1期生の入学式が、広島大学皆実分光(教養部）で行われた。入学生は水産学科19名、畜産学科19名、計38名であった。入学生が少なかったのは、新設学部であって、一般に理解が足らなかったことや、戦後の経済的貧困の為であった。

入学生は青年師範学校、旧制高校から転入生、復員学徒らと多彩な顔触れであった。したがって、学生群は個性、年令、経歴、能力の違う者の垂直的に分散する集団であった。現在のように同一年齢で、偏差値で管理された同一能力、無感動性の画一集団とは全く異なっていた。私は畜産学科第1期生のチューターであって、学生と常に接触し、苦楽を共にした。

学部のキャンパスは、福山市から東方6kmぐらい離れた深安郡大津野村津之下（通称皿山）の進駐濠軍の兵舎跡に設けられた。戦時中は香川県の託間海軍航空隊の分遣隊（水上機）であった。何分、兵舎跡であったから、広島の教養課程を終えて帰学する学生達を受け入れるために兵舎を教室、実験室に改造せねばならない。教官の研究室も同様であった。

予算獲得の為に、学部長山根甚信教授（元台湾大学理農学部長）は交通事情の悪い最中、東奔西走された。また共感を集めねばならない。それには宿舎を準備せねばらなない。学部長は寧日(ねいじつ)の無い日を続けられた。

教官も一体となり、水道の配管、電機工事等建設労務者顔負けの仕事をした。学部初期の学生達はみんなこの様な苦労をした。レールの上を走るのは簡単であるが、レールを敷くのは大変である。学生諸君は何一つ不平を言わなかった。新学部の創建の情熱に燃えていたのである。

学生の寄宿舎は、豪軍時代の下士官宿舎が利用された。なかなか立派な設備であった。教官宿舎には将校宿舎が利用された。中央の廊下を挟んで並んだ個室を、仕切り壁を除いて拡げ、各世帯に割り当てられた。便所や風呂は共用で、いわば共同住宅であった。この宿舎に9世帯が入居した。今から考えると懐かしい生活であった。

創設時のカリキュラムは別で述べられたので、割愛する。

助手であった私は、本来講義をすることはできないのであるが、そんなことには構ってはおられない。私は、家畜解剖関係の科目を担任した。26年3月には講師に昇任したから、公然と講義を行うことができた。当時の私の授業負担は週 6 日間のうち、2日間の午前の講義、3 日間の午後の実習といった過密振りであった。いつも修行に追われて、研究などできる余裕は全くなかった。

解剖実習には馬を使用していたので、午後の実習が終わるのは夜の7時～8時であった。学生諸君は不平も言わずに、握り飯を頬張りながら実習したものであった。私のハードな教育は、軍隊教育の影響があったことは、否定できない。後年、卒業生の

集会などで、学生時代で思い出に残った者は、解剖実習であったと等しく述懐するのであった。

チューターは学生との接点に立って、学生の相談役にならねばならない。当時は厳しい就職難の時代であって、卒業時に就職の決まっているのは、むしろ例外的であった。水畜産学部という聞きなれぬ学部名と、新設学部であるので、一般の理解が乏しかった。そこで就職依頼を兼ねて学部のPRに努めたものであった。

昭和 25 年の挑戦動乱の勃発とともに、警察予備隊が発足し、キャンパスの半分は警察予備隊の方に割譲し、有刺鉄線で仕切られた。この境界線を学生達は 38 度線と呼び、鉄条網越に隊員との間に口論が繰り返されたこともあった。

今から考えると、この創草期は私にとっては一人立ちする苦闘期でもあり、学生たちにとっても思い出多い時期であったと想う。学部創設期の学生達は社会に出て格別に目覚ましい活躍をしているのを見るにつけ、真の人間教育は、満ち足りた恵まれた教育環境よりも、むしろ貧弱で苦悩を伴う環境の方がよいのではないかとさえ思う。

緑翠会に寄せて

私はこの4月1日、水畜産学部に深い愛着と感慨をもってキャンパスを去りました。深い感慨と申すのは、私にとってこの学部は学部創設以来の勉強の場所であり、学生諸君と語り合った場所であるからです。と同時に奇しくも水畜産学部の最後の卒業生と一緒に卒業したからです。

振り返ってみますと、水畜産学部は昭和24年に発足し、昭和28年に第1回の卒業生を送り出しています。したがって今年の学部最後の卒業生は第 30 回卒業生となります。水畜産学部は 30 年の歴史を持って幕を閉じ、生物生産学部へと発展的に消滅したといえましょう。

この学部 30 年の歴史は期間的には決して永いとは申せませんが、語るにはあまりにも多くの歩みを続けました。なかでも、緑翠会の皆様を語らずしては、学部の歴史は語り得ません。何故なら会員の皆様は学部の構成員の一翼を担って学部とともに歩んできたからです。

学部のこの短い歴史にもかゝわらず、水・畜・食あわせて約 1500 名の会員が、少なくとも学部に足跡を残しています。個々人の足跡はたとえ微かで、瞬時的であっても、学風の形成に凝集し、学部の発展に関与しています。

水畜産の学風はなんといっても緑翠精神と申せましょう。緑翠精神は一般に高く評価されている通り堅実性と積極性にあると思います。緑翠精神は「緑翠会」の緑翠という言葉で象徴され、培養されたと思います。私は水畜産学部同窓会と言わず、あえて緑翠会と呼称した点に意義をかんじます。緑翠という語感は印象的で、新鮮で若々しい萌え出るバイタリティを想起させます。まさに若い水畜産学部にふさわしい言葉と思います。

角田教授によると、同窓会を緑翠会と呼ぶようにしたのは昭和 40 年からだそうですが、語源はずっと古く学部の草創期に遡るようです。創立初期の学生諸君の大半は寮生活を行い、寮名が緑翠寮でした。寮生諸君がいかにしてこの寮名を選んだかは知る由もありませんが、少なくとも多感な寮生諸君が新しい学風の礎石を創るという気

概に燃えて、このような躍動的な言葉が生まれたことでしょう。後に緑翠という言葉は学友会誌の「緑翠」、同窓会の「緑翠会」、広島大学駅伝の水畜産学部の「緑翠チーム」と定着し、緑翠精神が継承されています。

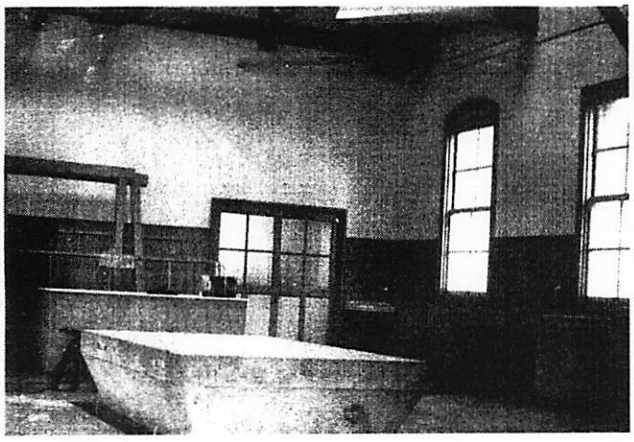
広島大学の森戸初代学長は「海青山翠」という揮毫を若い水畜産学部に贈りました。おそらく学長が初めて皿山のキャンパスを訪れた際、目の前の瀬戸内海の青と背後に迫る山の翠から、とっさに選んで学部の前途を祝したのでしょう。

ご承知のように、水畜産学部は戦後の疲労困憊の時代に水・畜の2科からなるユニークな学部とし一先ずは発足したものゝその後は意外と苦難の道を歩みました。それにも屈せず緑翠精神をもって成長し、発展を続け、後に食品工業化学科を創り3科編成とし、さらに生物生産学部へと発展しました。

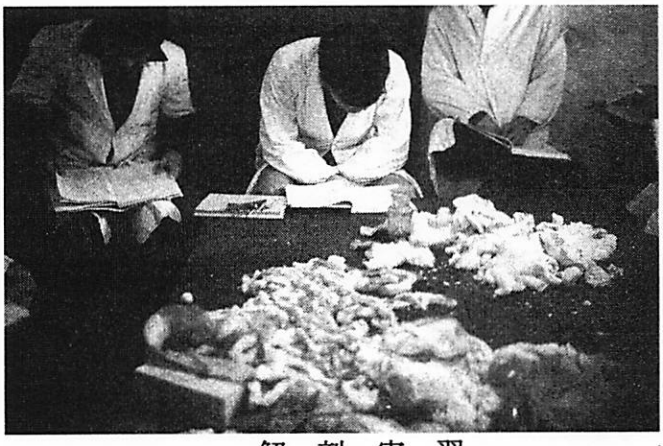
その苦悩の一つは度重なる学部のキャンパスの移転に示されます。キャンパスは先ずは福山市沖野上町から深安郡大津野村皿山（後に深安郡大門町となる）へ移り、再び福山市沖野上町還えり、三転しました。このような障害にもかゝわらず、その都度脱皮してまいりました。

緑翠精神の伝統は、学部30年の歴史の前半のいわゆる皿山時代に形成されたものであり、これが後半の福山時代へと継承されました。

福山の地で緑翠会のクラス会がしばし開かれていますが、皿山時代の学生は必ずといっていいほど曾遊の地を訪れています。それは単なる感傷ではなく、その地が緑翠の情熱を甦らせてくれることを期待するからでしょう。しかしそこは無残にも変貌し、昔を偲ぶ姿は何もなくなっています。学部が東広島に移転した暁には、福山のキャンパスも同様の運命を辿るかも知れません。

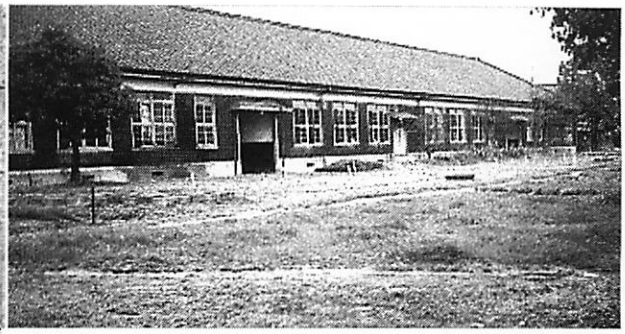


解剖実験台



解剖実習

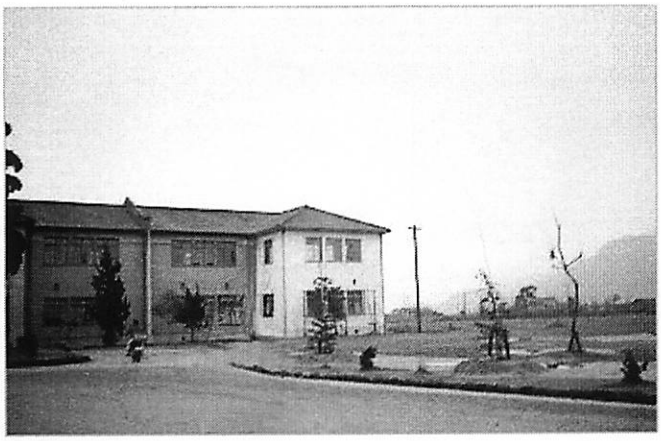
福山教場正門



福山教場

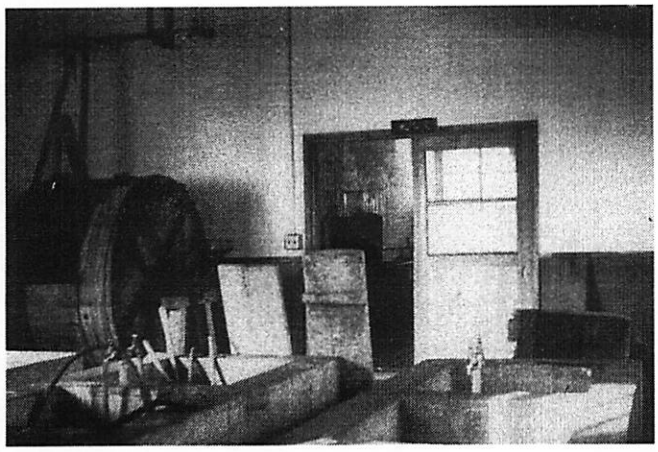
福山教場・体育館

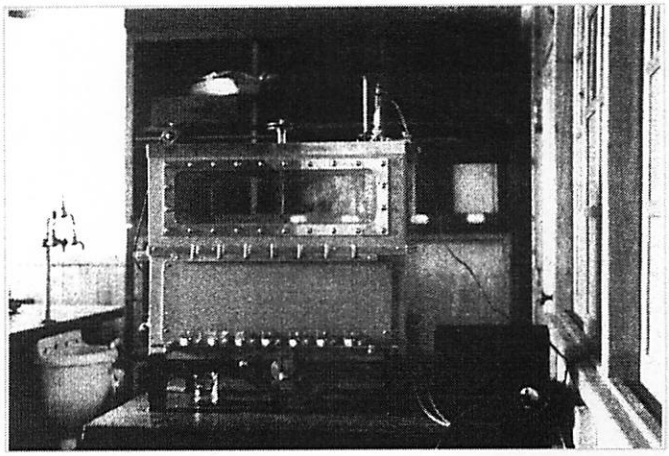
裏門の傍の皮革研究室



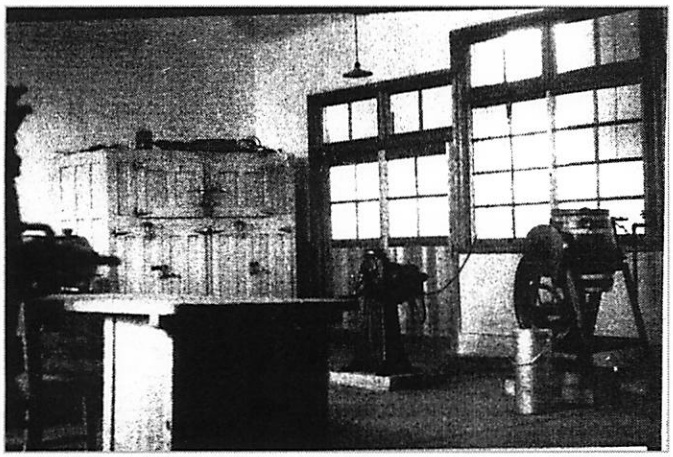
福　山　教　場

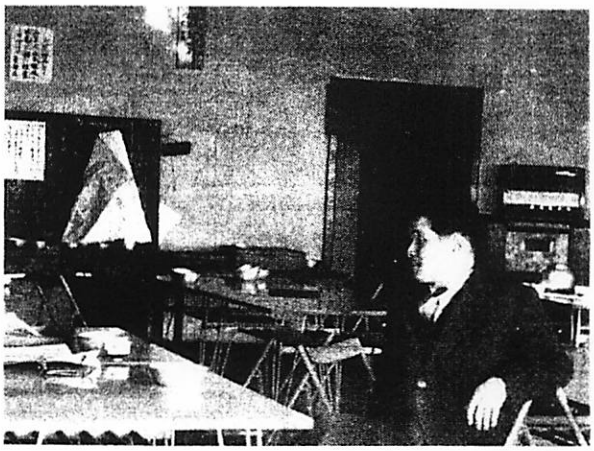
緑翠寮からニコニコバスに乗り日本化薬前で下車。歩いて福山教場へ





皮革加工室



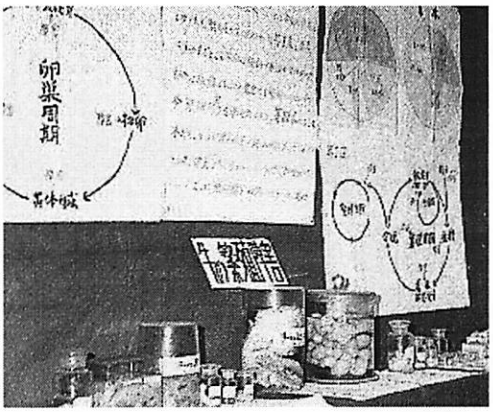


乳製品製造室

昭和 34 年 11 月 大学祭（福山分校）

乳房炎の検査方法

鞣し皮の展示



牛の繁殖障害について

夕方の自衛隊前のバス停　隊員は帰宅、学生は夜の福山へ出勤

緑翠寮の前庭で福山分校の学生との交流会

広島大学水畜産学部

緑翠寮々歌

作詞　松井英太郎（27年度生）
作曲　佐藤正次郎

一
嗚呼星霜は夢なれや　虚城はすでに人知れず
籬楽に月の影さやし　血潮たけりつつ感激の
双手に酒を湛えたる　玉杯今にその名あり

二
紫煙る未明　備南に誇る鞆の浦
仙翠峰はつらなりて　生気の意気はあふれつつ
青眼清き殿堂は　健児が夢を宿すなり

三
旭玲瓏に輝ける　白亜も雄々し豊潮の
船首に結ぶスクラムは　希望の風にいや固く
我が行く末も永久に　制覇の海に続くなり

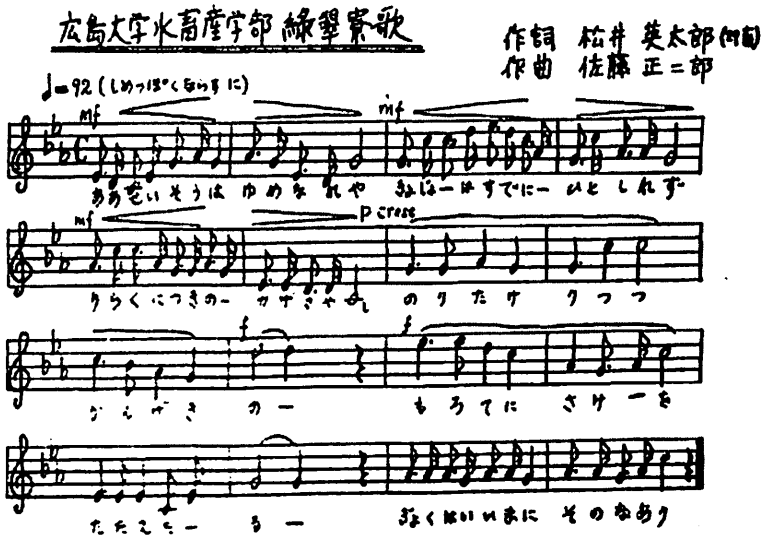
四
紅映ゆる夏草に　青毛の駒の群れ帰る
牧野に鐘のひびく時　一人のみして仰臥せば
白雲はるかに消え失せて　自由の天地何かある

五
花咲き花は実を結ぶ　ゲーテはあまた人を恋う
若き悩みは一握の　砂の脆きにあらぶとも
美に憧れし純情は　心の糧にとどむなり

六
もみじが瀬戸の初時雨　漕ぎ去る舟夫の歌悲し
旅愁は人の常なるも　雁音故郷に向うれば
研究道の貫徹を　涙の中に期するなり

七
現世の判に難くして　風さえ葦の世の流れ
学窓ここにうつろいて　巷の霧はとざすとも
われらが筆はたゆみなく　理想の粋を指すなり

八
盛衰栄枯玉楼の　一夜を如何で献るらん
信と愛と誠もて　詢歌の舞に耽りて
生年生きん歓びを　歌う男の惜別歌



水畜産学部逍遥歌

一
あゝりょう乱の　花吹雪
春宵の月影冴えて
栄華の舞にふけりては
緑酒にあつき涙あり

二
峯巒眠る夏の宵
夕暗瀬戸に漲りて
牛が岬に我れ立てば
ほうはいの声さかまきや

三
飾そうの宴酔いしれて
とうじん初弦影淡く
うこんの露をすすりては
世は泡影夢深し

四
あゝ的皪の夕日影
はや松ケ枝に消え失せて
秋寒月の霜の舞
雁声悲し夜半の月

五
ああ陣痛の曙陽光
濁世の巷照らすとき
永却の声わき立ちて
心理の淵に棹ささん

六
あゝ的皪の酒盛りや
覚世の詩地に満てば
雲けい低く群がりて
蒼龍高くうそぶかん

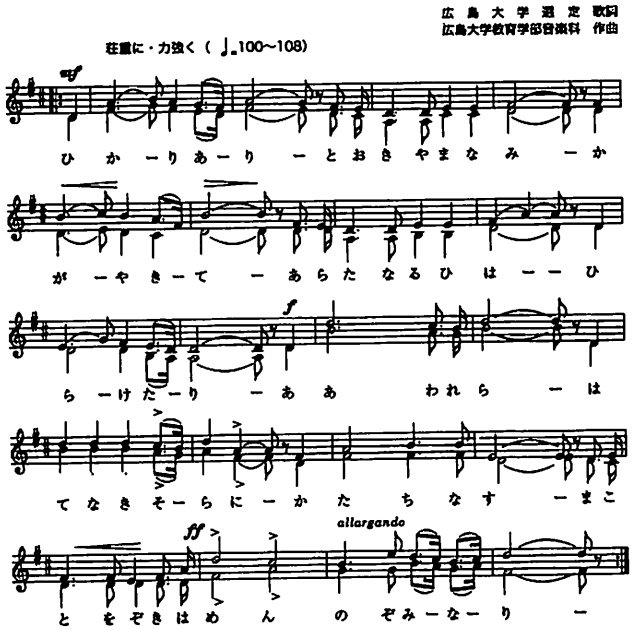
広島大学歌

歌詞　広島大学選定
作曲　広島大学教育学部音楽科

一　光あり
遠きやまなみ　輝きて
新たなる日はひらけたり
ああわれら
はてなき空にかたちなす
真(まこと)をぞ　きはめん望みなり

二　流あり
古き歴史は　七筋に
わかれてとはに伝へたり
ああわれら
移らふ時にかはらざる
善(よ)きをこそ　努(つと)めん集(つど)ひなり

三　緑あり
つよき不死の樹　廣ごりて
葉末は風に　そよぎたる
ああわれら
明るき道を影しるす
美(は)しきもの　求めん願ひなり



畜産数え唄（別名剛気節）

一つと瀬　人の嫌がる解剖の
　先ず手初めは骨拾い（ソイツア剛気だね）
二つとせ　二人仲良く精卵子
　人工授精はお手のもの（以下同じ）
三つとせ　見れば見るほど悩ましい
　綿羊刈のストリップ
四つとせ　寄って抱いて頬寄せる
　発情期かや夫婦馬
五つとせ　遺伝繁殖なんのその
　末は博士か馬喰か
六つとせ　無理に開いて股くぐり
　きわどい所が獣医学
七つとせ　なぐるも撫でるも知らぬ顔
　千枚張りかや牛の尻
八つとせ　山羊乳牛乳馬の乳
　バターもチーズも石けん化
九つとせ　ここは地獄の一丁目
　解剖室の手術台
十とせ　とうとう来ました屠殺場
　牛鍋　豚鍋　ジンギスカン

水産かもめ歌

一 へさきを離れてとぶかもめ鳥
かもめお前も又旅の鳥 エンヤサー
俺も明日から旅の鳥よ

二 暗い波止場に集る人も
俺を見送る人とてないがエンヤサー
泣いてくれるはかもめばかり

三 暗い夜空にまたたく星は
泣いて見送るあの娘の瞳エンヤサー
遠い船路の道標よ

四 つらい思いであの娘を得たが
一夜も添わず出船の合図エンヤサー
船出の後が気にかかる
さらばさらばと手を振る我に
ひびくは星のむつごとよ

遠洋漁業科逍遥歌

一 心猛くも鬼神ならず
人も生まれて情けはあれど
母を見捨てて海越えてゆく
友よ兄らと向日の日逢わん

二 潮の八重潮ふりさけみれば
男多恨の身の捨てどころ
まゆ引き らしき二日の月に
あわれしのばん乙女の情け

三 風雲速けき最果ての海
人生意気に感じて立てば
功名向か一睡の夢
あわれ成否は天地の心

四 蒼より青き黒瀬の川よ
皆実めいはるけき赤壁の島
額秀でたる若人我れら
浮かぶ白鳥万里を渡る

練習船豊潮丸の歌

一 青嵐帆々(ほんほ)薫る浜
朗々の気みなぎれる
大津野の辺に白鳥の
浮かぶに似たり豊潮丸

二 眉引き清き若人の
常久(ときわ)の蕩に光あれ
真玉(またま)白玉立ち騒ぐ
沖辺はるかに希望あれ

三 あゝ海鳴りのなり止まず
響き動(どよ)もす朝明に
真白(ましろ)のよそほいすがし
吾が豊潮は沖えゆく

四 秋水たけるぺんぼくよ
万象すべて眠るとき
ひとり目ざむる豊潮の
清き宴げに光充つ

五 あわれ数なき星ぐずの
流れもいるや涯(がい)果ての
永海遠くさぐるとき
銀りん旭日に踊るなり

六 満目満里水きらら
果海の海鬼気覆い
怒涛の渚の荒ぶとも
海原の上にがい歌あり

［おわりに］

私は昭和24年7月に広島大学水畜産学部に入学し、昭和37年3月に退官しました。13年間皿山・福山のキャンパスで先生や後輩と苦楽を共にし、私の人生の中で一番充実した期間でありました。

その後、蒜山の岡山県立酪農大学の助教授として勤務していた昭和40年8月3日、現天皇陛下が皇太子時代に「子宮内における仔牛の発育について」、を実物の標本でご進講させていただいたことがあります。殿下から「早い頃から手や足がはっきりわかるものですネ」とお言葉をいただきました。又、昭和42年4月には、昭和天皇・皇后両陛下行幸啓示時の際、「ジャージー種牛」の鼻先を持って、天覧頂く機会を得ました。当時、岡山の池田家に皇室から厚子さまが嫁がれた関係で、皇室の人々が岡山に来られる度に蒜山の広大な景色を観に来られていたからです。よき思い出の一時もありました。

それからは、多くの人にご指導とご厚情をいただき、感謝しながらの生活です。

「穴観音」を本尊とする積翠山白鷺寺の里で生まれた私は、日本百観音巡礼（西国三十三所、坂東三十三箇所、秩父三十四箇所の巡拝総合した日本を代表する 100の観音）と普陀落渡海を終え、龍水山松笠観音（広島市戸坂）のもとに観音力にすがって送りたいと考えています。

松笠観音寺

あなたの本籍地は？と尋ねられたら、それは灰塚ダムの湖底です。

参考及び引用書

水畜産学部５０周年記念誌

私の昭和史　　藤井　俊策

古いメモ　　松井英太郎